文化情報学研究所　公開シンポジウム　報告
今村庸一

「映像ドキュメンタリーの世界」

12 月 13 日（金）　15：00〜16：30　AV ホール
ゲスト：橋本佳子氏（ドキュメンタリージャパン
　　プロデューサー）
パネリスト：今村庸一（文化情報学研究所所長・
　　メディア情報学部教授）
　　石川賀一（メディア情報学部講師），
　　水沼友宏（メディア情報学部助教）

橋本佳子氏

12 月 13 日（金）、AV ホールにおいて、文化情報学研究所の公開シンポジウム「映像ドキュメンタリーの世界」が開催された。ゲストには、テレビや映画などで数々の優れた作品を制作してきたドキュメンタリージャパンのプロデューサー橋本佳子氏を迎え、ドキュメンタリー制作現場の実情や、多様化する環境の変化、そして将来への期待や展望について語ってもらった。後半には、所長の今村教授のほか、石川講師、水沼助教も加わってパネルディスカッションを行い、ドキュメンタリー作品を制作する上での課題や意義などについて質疑応答が行われた。会場には、学生や一般の人など 34 名の参加者があり、充実したシンポジウムを行うことができた。

シンポジウム開会に当たって、まず今村所長より、文化情報学研究所の沿革について、簡単な説明があり、近年の多様なメディア環境を幅広く理解し分析するため、例年、外部講師を招いて公開シンポジウムを開催していることが説明された。そのあと、ゲストの橋本佳子氏について、今回のテーマである「映像ドキュメンタリーの世界」において、長年、数々の名作を制作され、輝かしい受賞歴があることも紹介された。1981 年に設立した制作会社「ドキュメンタリージャパン」の創立期のメンバーであり、一時、代表取締役も務められていたようにドキュメンタリー番組制作会社の経営や運営にも長らく携わってきた経験がある。この分野の制作現場も経営分野も幅広く知識と経験がある。文字通り、この世界のスーパーウーマンでもある。

登壇した橋本氏は、基調講演として、これまでの自身の活動歴や、制作現場の実情、近年のテレビ、映画、インターネットなどの多様な環境についての話もされ、最近ネット配信された作品も紹介された。

最初に、基本的なことだが、プロデューサーの仕事とはどういうものか、ディレクターとの違いや、制作会社の仕事についてもわかりやすい説明があった。中でも、このドキュメンタリー番組は、なかなか視聴率が取れず制作費もかかることもあって、日本のテレビ番組業界では困難な状況に置かれている。どんなに優れた内容であっても、民放各局では放送時間枠が取れず、深夜や早朝に放送されているのが実情でもある。ドキュメンタリージャパンは実績のある独立した制作会社であるので、いい企画がある場合には、各方面へ放送を働きかけるが、現時点でこのドキュメンタリー番組は、やはり NHK で放送する場合が多くなるということも報告された。

次に、海外の状況について興味深い話があった。日本では、ゴールデンの時間帯は、視聴率が

取れる娯楽番組が多くなる傾向があるが、最近ヨーロッパでは、ドイツやイギリスなど、むしろ硬派とされるドキュメンタリー番組に人気が集まっているという。日本の状況と単純に比較はできないかもしれないが、メディア環境がインターネットやSNSの普及で多様化していることは世界共通である中で、ヨーロッパ諸国ではテレビ番組に優れたドキュメンタリー番組を求める視聴者の需要があることが窺われる。市場原理の下で安直な娯楽番組を量産することよりも、テレビには時代や社会を深く掘り下げるような役割があることが大切であるという認識が定着してきているのであろうか。テレビ放送と視聴者の成熟度を考えさせられるような問題提起でもあった。

また橋本氏は、テレビ以外にも、映画やネット配信でもドキュメンタリー作品の発表の場を広げてきている。ひとつには、2018年に東京・豊島区にオープンした「シネマハウス大塚」のスーパーバイザーを務められており、ここではなかなかテレビでは放送されないような作品の自主上映を行っている。2017年には、アメリカとの共同制作で音楽家の坂本龍一のドキュメンタリー映画を制作したが、文化庁映画賞受賞やヴェネチア国際映画祭に招待されるなど、内外から高い評価も受けている。橋本氏によれば、テレビより映画の方が世界の境界や制約が少なくて、優れたものであれば簡単に国境を越えて上映されているということでもあった。同じ映像でも、テレビ放送と映画上映では大きな違いがあることも、改めて再確認させられた。それから、近年ではインターネットやSNSの普及によって特に若い世代の映像作品への接触方法が変わってきていることも話題に上った。TwitterやYouTubeやNetflixなど、動画配信が容易になることで、映像ドキュメンタリーの作品制作現場にどのような影響があるのか、大変、興味深いテーマでもある。この点について、橋本氏からも、最近の実情についての指摘があり、ネット配信でもスポンサーがつくケースが増えてきており、テレビ以外にも大型イベントなどの一環としてネット配信用のドキュメンタリー作品が制作されることもあるという。それから、まだ一部ではあるが、これまで映像ドキュメンタリー作品を制作するための資金としては、民放テレビはほとんどがスポンサーからの広告収入に頼っていたが、近年は利用者にインターネット経由で資金提供を促すクラウドファンディングの動きも出てきているという。従来まで、ドキュメンタリー作品といえば、大手のマスメディアが制作し視聴者は、一方的に「鑑賞」させられる立場であったものが、インターネットのクラウドファンディングで広がっていけば、利用者の方からの要望で資金が提供され、何らかの目的をもって映像ドキュメンタリー作品が制作されていく可能性が広がることも考えられる。これまで、特に民放

今村庸一・所長　挨拶

橋本佳子氏　基調講演

テレビでは放送時間枠が確保できずに、深夜や早朝などしか放送できなかったものでも、このようなインターネットの配信やクラウドファンディングの拡充により、新たな可能性が広がっていくことも示唆されていた。

続いてネット配信の例として、11 月に WBSS 世界バンタム級決勝戦で見事勝利した井上尚弥に関するミニドキュメント作品が紹介された。これは、試合前の練習風景やオフのときの素顔などを取材したシリーズもので、ネットで配信される新しいドキュメンタリーのスタイルでもあった。テレビ番組や映画作品は、どちらかといえば完成された「ドキュメンタリー作品」という意味合いが強いが、ネット配信の場合は、ビッグイベントへ向けての事前情報や番宣の側面もあり、また試合当日のテレビ放送へ向けての布石ということもある。テレビ、イベント、ネット配信など、メディアの垣根を越えて、映像ドキュメンタリーが複合的に利用される新しい展開が示されていた。

それから、近年、橋本氏が手がけられたもののうち、日本に在住する外国人コミュニティーを扱ったものがある。東京・新宿区の新大久保という町は、古くから「コリアンタウン」として、在日の韓国・朝鮮系の人々が生活している所として知られているが、近年、ここにベトナム人、ネパール人など、新たな外国人コミュニティーが広がってきており、そこに暮らす人々の日常や課題などを取り上げた仕事についても紹介された。取材を進めていくと、古くからそこに住んでいる日本人、韓国・朝鮮系の人たち、そして新たに加わった新外国人など、それぞれ違った文化やルーツをもった人々が共生する様を取材することで、今、日本が直面している「国際化」の諸問題が浮き彫りになってくるという。こうしたテーマは、最初から結論があるわけではなく、取材を進めていくうちに、作品のテーマが見えてくることが多いと、橋本氏は答えていた。ただ、ドキュメンタリーの場合は、取材や撮影をするのも大変で、100 時間くらい収録したとしても、実際に編集して番組に使われるのは 1 時間程度だという。それだけ優れたドキュメンタリー作品を制作するためには、一見すると無駄と思われるような時間と労力が不可欠であるということも、思い知らされることとなった。

後半では、石川講師、水沼助教も加わって、パネルディスカッションを行った。石川講師からは、ドキュメンタリーを制作する際に、現場に行ってから「発見」があったり、現地に存在する「場」の雰囲気を伝えたりすることについて質問があった。また水沼助教からは、取材や撮影するときに、政治や行政等、様々な制約や規制があるときにどのように対処しているのか、こうした困難な仕事を長年継続してきた原動力は何か、という質問があった。これに対して橋本氏からは、現場は

ネット配信の作品を紹介

パネルディスカッション

まさに「生き物」であり、現地に行って初めて分かることもあるし発見もある。制作者としては、その現場の状況を、正確に視聴者に伝えることが何より大切なことで、基本的にはチームで仕事を進めていくので、そのような共通意識を持つことが大切であると回答があった。また、様々な制約や規制などは、当然、作品を制作するときに常に影響してくるという。東日本大震災の折に、福島第一原発の影響で福島県双葉町から埼玉県加須市へ避難してきた住人を取材した作品群がある。このときにも、政治や行政はもちろんのこと住民側からも全てのマスコミの取材は拒否されていたのだが、事情を説明して交渉した結果、ドキュメンタリージャパンのクルーだけ長期取材が認められたという。それは単に制約や規制の問題ではなく、取材対象との信頼関係を築くことと、今、映像に記録しておかないと、現在起こっていることが後世に伝えられないという問題意識から、先方にもその熱意が伝わり、取材が実現したということであった。改めて、優れた映像ドキュメンタリーを作るのは、機材やコンピューターなどではなく、人間と人間の絆であることが実感された。

最後に、今後の映像ドキュメンタリーの世界について、特に学生などの若い世代へのメッセージとして、橋本氏からは、とにかくいろいろなことに興味を持つことと、いい番組をたくさん見ることが指摘された。ドキュメンタリー番組というと、とかく堅苦しく、何か難解なもののようなイメージを持つかもしれないが、自分の身の回りにいくらでも素材があり、それらをどのように掘り下げていくかが問われるということになろう。34名の参加者から寄せられたアンケートには、映像ドキュメンタリーの制作現場の貴重な話が聞けて、とてもよかったという意見が大多数であった。参加者の満足度も極めて高いものであったことが分かる。今回、橋本佳子氏には、本学の文化情報学研究所のシンポジウムに参加していただき、大変、有意義な話をしていただいた。改めて感謝したいと思う。

橋本佳子氏　略歴

1981年ドキュメンタリージャパン創立に参加、代表取締役を務める。放送文化基金個人賞、ATP個人特別賞、日本女性放送者懇談会放送ウーマン賞を受賞。テレビ番組の受賞作品は、芸術祭、放送文化基金、ギャラクシー、民放祭、ATP賞など多数。2018年に自由な表現のための多目的スペース「シネマハウス大塚」を東京都豊島区にオープンし、スーパーバイザーを務める。最近作、『いしぶみ』（16／是枝裕和監督）、『Ryuichi Sakamoto: CODA』（17／スティーブン・ノムラ・シブル監督／ヴェネチア国際映画祭正式招待作品／文化庁映画賞）、『沖縄スパイ戦史』（17／三上智恵監督／文化庁映画賞／キネマ旬報文化映画1位）など。